頼近美津子の音楽教育 etc.トーク

第49回

写真—岡本 央
構成—岡地まゆみ

女の子と男の子は違う

頼近　「岳本恭治ピアノスクール」では、現在、「ボーイズ・クラス」の開設を準備されているそうですが、やはり女の子と男の子とでは興味を持つことが違いますか。

岳本　実は最近、男の子を教え始めたんですけど、あまり練習してこないものですから、一緒にピアノの中に頭を突っ込んで、音の出る仕組みを説明してみたんですよ。そうしたら、ピアノを弾くより、そっちのほうがおもしろいらしくて…。やっぱり女の子と男の子は違うんだと感じたわけです。それと、音楽教室でたくさんの女の子に囲まれて肩身の狭い思いをしている男の子たちに、のびのびレッスンができる環境をつくってあげたい、という思いもありました。

頼近　先生ご自身の窮屈なご経験からですか。

岳本　私は楽器メーカーがやっている音楽教室でしたが、この業界にいる限り、女性に囲まれる、という環境がずっと続くんでしょうね（笑）。

頼近　（笑）習い始めは幼稚園ぐらい？

岳本　いえ、9歳からです。

頼近　それって遅いほうですよね。きっかけは？

岳本　母が知り合いの楽器会社の営業マンから、楽器購入を勧められたんですよ。で、うちにオルガンがやって来た。私にとっては、弾くこと以上に、楽器そのものが機械としておもしろかったんですね。1年習うと、今度はピアノがほしくなった。親にしつこくねだって、やっと買ってもらいました。

頼近　オルガンが9歳ですから、ピアノが来たのは10歳？

ゲスト●ピアニスト・音楽ジャーナリスト

岳本恭治さん

Kyoji Takemoto●東京都出身。武蔵野音楽大学器楽学科ピアノ専攻、国立音楽院ピアノ調律科卒業。ロンドン・トリニティカレッジグレード演奏家ディプロマを最優秀の成績で取得。1981年、浦和交響楽団定期演奏会でベートーヴェンのピアノ協奏曲第2番を共演しデビュー。演奏活動とともに、ピアノ構造学・改良史・奏法史の研究者として活躍。講演、レクチャー・コンサートを国内外で行なっている。日本におけるJ.N.フンメル研究の第一人者。2001年スロヴァキア国際フンメル協会より「フンメル賞」を受賞。音楽誌への執筆、『ピアノを読む』（音楽之友社）、『江戸でピアノを』（未知谷）、『200CDシリーズ・ベートーヴェン』（学研）など著書多数。現在、日本J.N.フンメル協会会長。国立音楽院講師。
岳本恭治オフィシャルホームページ：
http://jnhummel.com

ピアノは指が鍵盤に接触した状態から弾く

「ピアノの先生は、ピアノという楽器にもう少し関心を持ってほしい」といった調律師の声を、たびたび耳にする。しかし、メカに弱い先生の中には、アクションの略図を見ただけで気後れしてしまう、という人も少なくないだろう。そこで、ピアノという楽器について勉強してみようという気持ちになっていただけるよう、日本で数少ない調律ができるピアニスト、岳本恭治氏に、ピアノという楽器を知ることの重要性を、あらためてお話しいただくことに。

岳本　そうです。5月でした。で、次は音楽大学の附属中学に行きたいと。

頼近　それって無謀かも…（笑）。

岳本　無謀です。ソルフェージュの勉強もしないまま受けて、「これ、どうやって歌うんですか」と試験官に聞いたのを覚えています（笑）。で、見事に落ちました。

頼近　それには、驚きません！（笑）。

岳本　でも、拾ってくれた学校がありまして。

頼近　それはすごい！　試験官は先生の素質を見抜いたんでしょうね！　さらに驚くのが、ピアノを始めてわずか3年足らずで、音楽の学校に進むことを決意されたということです。

岳本　なんだったんでしょう。自分でも不思議です。

　ただ、音楽教室の所長さんには、すごくかわいがられたんですよ。「友達を連れてきてくれたら、何かあげるよ」と営業まで任されました。

頼近　で、なんとお返事を？

岳本　じゃあ、グランド・ピアノのカタログがほしいって。

頼近　カタログ？　でも、それは所長さんにとっては。

岳本　お安いご用（笑）。

頼近　ですよね。でも、なんでまた、ピアノのカタログだったんですか。

岳本　車のカタログを見るのと全く同じ感覚ですね。

頼近　確かにうちの父も、東京モーターショーに合わせて上京しては、カタログを集めて喜んでいますけれど、ただ…ピアノは車ほど差がないですよね。色もほとんどが黒ですし…。

岳本　その黒も、メーカーによって違うんですよ。カワイのほうがヤマハより青みがかった黒ですね。

頼近　そんなところの違いの比較どころか、私は、ピアノという楽器の基本的なことでさえ、まだまだ知らないことがいっぱいあります。

岳本　そういう方のほうが多いんじゃないでしょうか。

今、いかにベートーヴェンが大音響で弾かれているか

頼近　楽器について知ることで、演奏にどんなメリットがあるのでしょうか。

岳本　例えば、ピアノはある一定の強

さに達すると、いくら力を入れてもそれ以上大きい音は出ない。汚い音になるだけなんです。それがわかっていれば、無駄に鍵盤をぶっ叩くようなことはしなくなりますよね。

あとは、作曲された当時のピアノについての知識も、役立ちます。グランドの場合、現在のピアノですと、左側のペダルを踏むと鍵盤が右側に少しシフトして、3本の弦のうちの2本をハンマーが打つようになるわけですが、ベートーヴェンの時代のピアノには、3本を1本にできるものもあったんですね。

頼近　私、ペダルがたくさん付いた初期の型のピアノを初めて見たとき、とても驚きました！

岳本　古典派の時代には、6本のペダルがあるピアノも多く存在しました。ベートーヴェンの時代というのは、弱い音を美徳としていましたから、大きくするペダルは今の一番右側のペダル、あれひとつ。つまり、今、いかにベートーヴェンが大音響で弾かれているか、ということです。一度《ハンマークラヴィーア》の強弱記号を数えたことがあるんですけど、70％はメゾフォルテ以下でしたね。それなのに、なぜ、ベートーヴェンの音楽はドラマチックなのか。それは、弱い音量で我慢して、我慢して、我慢して、ようやくスパイスでガツンと強い音量を出すからなんですね。

残りの5本のペダルは、ただ音量を減らすというよりは、音色を変えるためのペダル。

頼近　ということは、何かを弦とハンマーの間に挟んでいたんでしょうか。

岳本　その通り。布や紙が多いですね。原理は、現在のアップライトピアノの真ん中のマフラーペダルと同じです。紙を当てた場合は、わずかですが弦の振動でビリビリっといった音になります。

頼近　それらのペダルの指示を、ベートーヴェンは楽譜に書いているんですか。

岳本　書いていません。でも、シューベルトは書いています。

頼近　でも、それを知っていれば、今のピアノで弾くときも、その箇所は音色を変えて…。

岳本　弾かなきゃいけないですね。でも、ほとんどの方が無視しています（笑）。

頼近　私は子どものころ、モーツァルトを弾くたびに、「そこはもっと軽やかに、コロコロコロって弾いてちょうだい」と先生から言われたんですけど、それがうまくできなくて…。ところが、テレビの番組でザルツブルクに行ったとき、モーツァルトの生家に展示してあるピアノを弾かせていただいて、私、わかったんです！　そうか、このピアノなら、コロコロコロって弾けるぞ、と。鍵盤は軽いし、鍵盤の幅は狭いし。

岳本　それが、ウィーン式ピアノの特徴なんですね。今は鍵盤の深さが10ミリ、ピアノによっては9・7ミリ程度に調整しますけど、モーツァルトの生家のピアノは、5ミリいくかいかないかです。

あと、チェルニーに書かれているメトロノームの数字を、速過ぎると感じたことはありませんか。

頼近　あっ！　それも当時のように鍵盤が軽いピアノだったら…。

岳本　そうなんです。なのに、「なんで弾けないの！」と先生方は生徒さんを怒る（笑）。

ピアノというのは、一番下までちゃんと鍵盤が下りることで、ハンマーが47ミリ上がる仕組みになっているんですね。確かに5ミリ下りた地点で、音はポーンと鳴りますから、あとの5ミリは遊びなんですけど、だからって、ピアニッシモを鍵盤の浅いところでヒョロヒョロ弾いては、大きなホールの一番後ろの人にまで音は届かない。

一番高い鍵盤を弾くと、鍵盤の底の棚板がコツコツと音をたてるじゃないですか。あのコツコツを下部雑音と言うんですが、それを適度に混ぜないとピアノの音にはならないんですね。だから、鍵盤の底まで弾かなくてはいけない。

頼近　雑音と聞くと、出してはいけない音のような気がしますが…。

岳本　鍵盤を完全に下まで適度な圧力で押したときに発生する下部雑音は、音色を作るための必須アイテムなんです。

楽器に即した弾き方をしないから、弾けない

頼近　ところで、ピアノ科を卒業してピアニストとして活動していらした岳本先生が、なぜ、調律を勉強しようと思われたんですか。

岳本　国立音楽院のピアノ調律科に入ったのは40歳になったころなんですけど、中学のときから、あらゆる音楽書を読みあさって、ついに読む本がなくなってしまったんです。少なくとも、日本語の本はないと思います。あとは、ピアノについての本を自分自身で書くことを決心し、もう自分でやるしかないと。でも、苦しみましたね。ピアニストの耳と調律師の耳って、違うんですよ。ピアノ弾きは音のみを聴いてしまう。

頼近　ん？　調律師は音だけを聴くのではない？　じゃあ、何を聴くんですか。

岳本　音とともにうなりを聴くんですよ。例えば、5度のトと1点ニなら、2秒間に1回、共通倍音のうなりを入れる。でも、音が気になって、合わせられないんです。あれはやってみないとわからないと思います。

頼近　調律を勉強されて、何を一番お感じになりましたか。

岳本　先ほども言いましたけど、やっぱり鍵盤は叩くものじゃない、もちろん「落下のタッチ」というのがありますが、基本的にはピアノは指が鍵盤に接触した状態から弾くのが一番いいということです。たとえ、鍵盤のわずか1ミリ上から落としても、それはハイフィンガー。その必要はまったくないんです。外人ピアニストが演奏する手を見て、指が鍵盤に吸い付いたままほとんど動いていない、と感じたことはありませんか。

頼近　レッスンで先生に言われた手の形と違うなぁと、幼心に不思議に思った記憶はあります。

岳本　よく試験で順番を待っている生徒が、楽譜の上でコツコツ音をたてて指を動かしている姿を見ますよね。

頼近　それ、私もやります…。

岳本　机でコツコツ、壁でコツコツ（笑）。それをウィーンの先生が見たら、「なんで下に降りないところで、そんなことをやるんだ？」と言われますよ。彼らは鍵盤に指をくっつけた状態で弾きますから、指を上げなければ弾けないような場所で指を動かしたりはしません。しかも、上から指を下ろすことで、鍵盤に指先が当たる音が出てしまう。上部雑音と言って、こちらは下部雑音とは違って、全く不要な音です。

ピアノの演奏は、鍵盤に触った状態で10ミリ押す、その後は、ただ力を抜くだけでいいんです。水に板を浮かべ、それをぐっと指で押した後、もとの位置に戻すにはどうしますか。

頼近　力を抜けば下からの力を感じますよね。その力で板は自然に上がってくる…。

岳本　そう。それがピアノのアクションです。いいピアノは、力を抜いたときに感じる抵抗が油圧式ポンプみたいなんですね。鍵盤を上げるときは、鍵盤の上でふっと力を抜くだけ。力を入れて指を上げている人、けっこう多いですからね。

頼近　ただ…私自身がそうでしたが、手のことについてあまりうるさく言われると、自分には無理だとめげてしまう。そうならないためには、どうしたらいいでしょうか。

岳本　正しい奏法によって、ピアノを弾くのが楽になったと子どもに感じさせることが大切だと思います。ピアノという楽器に即した弾き方をしていないから、思い通りに弾けないということ、たくさんありますからね。

例えば、「チェルニーなんてつまらない」とおっしゃる方のほとんどは、弾けないからつまらないんですね。

頼近　苦痛なんですよ。弾いているうちに、腕がパンパンに張って痛くなったり…。

岳本　それは句読点で力を緩めないからです。バロックと古典派の場合、句読点はだいたい小節線と一致します。ショパンぐらいになると、小節線とメロディーが合わなくなるんですけど、例えば、チェルニー30番の第1番なら「ソドレミレド ソドレミレド」で1回緩める。で、「ソレミファミレ ソレミファミレ」でまた緩める。うまく緩められないときは、句読点で止まってもいいです。中には力を入れたまま止まっている子がいますから、緩めるとはどういうことか、ちゃんと説明する必要はありますけど。

頼近　それだと、音楽が途切れ途切れになってしまいませんか。

岳本　ようかんを何等分かに切って、もう1回くっつけると思えばいいんですよ。そうしたら、見た目にはつながっていますね。

ショパン・コンクールでも、ショパンのエチュードを句読点ごとに区切って、その度に力を緩めながら練習している出場者をよく見かけますよ。だから私はレッスンで言うんです。これは岳本が言っているんじゃなくて、ショパン・コンクールに出るようなレベルの人たちがやっていることなんだから、信じなさいって。

ベートーヴェンもレッスンのとき、音を間違えても絶対怒らなかったけれど、句読点の間違えは許さなかった。文節、つまり、フレーズがわかっていない証拠ですからね。それは、知らない国の言葉で書かれた文章を丸覚えして、どこで区切っていいかわからないまま読んでいるようなものです。

頼近　ただ…切ることはできても、間があかないようにするのは、切ったようかんをくっつけるほど、容易ではないかと…。

岳本　できない子は、1週間で1段しかやらせない。間違ったまま弾いても意味がないですからね。

頼近　譜読みが楽でうれしい反面（笑）、すぐに飽きてしまいそう…。

岳本　20世紀の巨匠たちが学んだモスクワ音楽院では、最初の5年間は毎日、音階とアルペジオだけです。ゆっくりのテンポで根気強く、しかも、飽きさせないように、時には作曲家のおもしろいエピソードを話したり、ピアノの中を見せたり。

頼近　楽しみがあれば、挫折しないでがんばれそうな気がします。

さて、この号が店頭に並ぶころには、「ボーイズ・クラス」がスタートしているわけですが、岳本先生のように、ピアニストとしてだけでなく、研究者としても活躍する人材がどんどん育っていくとよいですね。

岳本　私は自分の役割のひとつに、技術者と演奏者の橋渡し役があると思っているんですけど、それができる人材も「ボーイズ・クラス」の中で育てていきたいですね。そのためにも、なんとか成功させたいと思っています。